

春の特別企画展『見て触って考えるイタイイタイ病講座・語り部リレー講話』を開催しました。

4月29日（土・祝日）から5月7日（日）まで、春の特別企画展を開催しました。

今回で4回目となる企画展は、資料館の展示の中で特に理解しづらいカドミウムの体への影響や患者の病態について、病理標本をコンピューターで拡大して見たり、臓器模型を直触ったりしながら学ぶ『見て触って考えるイタイイタイ病講座』や病理標本の『パネル展示』、そして資料館の8名の語り部が交代で講話を行う『語り部リレー講話』と3点の企画として行いました。

まず、開館記念日である4月29日（土・祝日）に開催した『見て触って考えるイタイイタイ病講座』では、30名の参加者が患者の骨や腎臓を再現した模型に触れるなどイタイイタイ病について理解を深められました。

講座では、富山大学大学院医学薬学研究部の井村穰二教授より、イタイイタイ病の原因として、カルシウムが不足することによって骨折しやすくなるなど説明があり、参加者は真剣に耳を傾けておられました。

その後、参加者は2班に分かれ、病理標本をバーチャルスライドで見たり、健常者とイタイイタイ病患者の各々の骨や腎臓の模型を実際に手に取っておられました。参加者の中には、小中学生の姿もあり、特に骨の重さの違いに非常に驚いていた様子が印象的でありました。

また、4月30日（日）から5月7日（日）まで行われた『語り部リレー講話』では、8名の語り部がイタイイタイ病で苦しんだ家族や当時の暮らしの様子、裁判中の出来事等について交代で語っていただきました。期間中は、延べ180名と多くの方々に聴講いただき、講話後、語り部に熱心に質問をしておられる参加者の姿もあったことから、イタイイタイ病を風化させてはならないという思いを強く持っていただけたのではないのでしょうか。

このように、資料館では、今後もイタイイタイ病の教訓をしっかりと後世に伝えていくために、工夫をこらした企画展を開催していきたいと考えております。



富山大学大学院
井村穰二教授による講演



骨の模型を持ち比べている
参加者



病理標本をバーチャルスライド
で見ている参加者



パネル展示



語り部リレー講話（小松雅子氏）

『課外学習サポート事業』を利用し来館された子どもたちの 「学び」の報告 ～南砺市立平中学校～

資料館では、今年度も次代を担う多くの子どもたちにイタイイタイ病の恐ろしさやその克服の歴史を学んでいただくため、学校等に無料送迎バスを提供する『課外学習サポート事業』（環境省委託）を実施しています。

この事業における今年度最初の利用校として、南砺市立平中学校1年生17名が来館され、イタイイタイ病について学習されました。

南砺市立平中学校1年生の生徒は、毎年この時期に来館いただいております。平成27年4月16日（木）（平成24年4月29日の開館から918日目（営業日））には、入館者10万人達成の記念セレモニーとして節目を祝いました学校でもあり、資料館として思い出深いものがあります。

生徒の皆さんは、ガイダンス映像の視聴、展示室内見学の後、イタイイタイ病対策協議会前副会長（今年4月から顧問）で、資料館の語り部でもある高木良信氏の講話を聴講されました。患者であった母親やその家族の苦しみ、当時、副会長として被害住民と共に裁判を闘ってこられた当時の状況等は、生徒らにもしっかりと伝わっていると感じられました。

見学後のアンケートでは、「イタイイタイ病の恐ろしさを知ることで、環境と健康の大切さがわかった。」などの声が多く、資料館での学習が着実にイタイイタイ病の理解に結びついていることを確認しました。

今後も、資料館ではこの事業を利用し来館された子どもたちの学びの報告について、メールマガジンやホームページで何回か紹介いたします。



展示見学の様子



高木良信氏の語り部講話

開館以来初・8ヶ国語による資料館紹介の展示を行っています。

資料館では、5月3日（水・祝）から6月30日（金）まで、富山きときと空港2階中央ロビーにて、資料館の施設概要や交通案内などを紹介したパネル（ポスター）を8ヶ国語（日本語・英語・中国語・韓国語・ロシア語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語）にて展示しております。

これまで、国内外への情報発信強化のため、展示室の展示パネルをはじめ、音声ガイド、展示ガイドブック、ガイダンス映像、そしてホームページについては、5ヶ国語（日本語・英語・中国語・韓国語・ロシア語）にて対応しております。

さらに、三つ折パンフレットについては、平成28年春にフランス語・スペイン語・ポルトガル語を新たに作成し、既存の5ヶ国語に合わせて8ヶ国語にて対応するなど充実を図っておりますが、今回8ヶ国語版のパネル（ポスター）として展示するのは初めての取り組みでありますので、特に海外からの入館者の増加が大いに期待されると思われまます。

このように、イタイイタイ病の教訓や先人たちの克服の歴史をしっかりと後世に伝えていくことが資料館の使命と考えておりますので、引き続き、さまざまな形での情報発信を強化してまいります。

